

# 課題達成談話における「なんか」の使用

## —会話参加者は否定的態度をどのように表現するのか—

杉崎 美生(日本女子大学)

### 1. はじめに

話し合いなど共通の目的に向かって何かに取り組むとき、参加者全員が同じ意見を持っていればそれは円滑に進む。しかし、全てがそのように実行できるわけではない。相手と異なる意見を述べることはより良い結論に到達するために避けられないことであるが、否定的な態度を直接的に示す発話はコミュニケーション上の問題を引き起こしやすいと考えられる。そのような場面で「なんか」は頻繁に使われる語であり、「否定的な意見を暗示する機能」(鈴木, 2000)を持つことが指摘されている。しかし、それらがやりとりの中でどのように達成されるのかは、未だ明らかではない。本研究では課題達成談話をデータに、話し手が否定的態度を示す際に発話する「なんか」に着目し、その方法として特徴的な2つのパターンを提案することによって「なんか」の語用論的な機能を明らかにする。

### 2. 先行研究

「なんか」は、内容がはっきりしない事物を指し示すことや、はっきりとした訳もなくある感情が起こるさまを示すために使われる語である(大辞林, 2019; 日本国語大辞典, 1975)。しかし、実際の会話で「なんか」は発話の開始、発話間のつなぎとしての使用などが見られ、辞書で説明される用法だけでは説明が困難とされてきた。「なんか」についてはこれまで様々な分析が行われ、「だいたいこんな感じ」という心的状態に対応する言いよどみ(田窪・金水, 1997)、発話内容への態度を曖昧にする機能を持つこと(鈴木, 2000)、話題の開始、和らげの機能を持つこと(飯尾, 2006)などが指摘されてきた。また、話題の発展、発話内容の具体化、話題対象への評価など discourse marker として機能すること(内田, 2001)や「これから詳細に述べていく」という積極的な発話に関与する pragmatic marker としての機能を持つこと(Sugisaki, 2023)が説明されてきた。これらの分析は、話し手が聞き手に伝えたい情報を持ち、語りを進めていく場面において発話される「なんか」に着目しており、「なんか」を発話することによって、話し手が聞き手に何らかの態度を伝えることを明らかにしてきた。一方、「なんか」には「否定的な意見を暗示する機能」(鈴木, 2000)が指摘されているが、これについては他者とのやりとりに着目した分析が行われておらず、未だ議論が尽くされていない。この機能を明らかにするためには、会話参加者が互いに意見を述べ、相談をしながら会話を進めていく場面で使用される「なんか」を分析する必要がある。

### 3. データ

本研究はミスター・オー・コーパス<sup>1</sup>というデータ・コーパスを使用している。実験参加者は日本語母語話者で、2名が1組となり、15枚のカードを並べ替えてひと続きのストーリーを作る課題を与えられ、互いに意見を出しながら取り組む。この課題には制限時間が設けられていない。また、作り上げるストーリーには正解がないことを伝えており、参加者たちはそれぞれがふさわしいと考えるストーリーを作り上げるまで課題に取り組むことができる。本研究では、合計26組がストーリーを構築する過程で、一方が他方の考えに対して何らかの否定的態度や反論を示すような言語行為を抽出し、特に「なん

<sup>1</sup> ミスター・オー・コーパスは、「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」(平成15～17年度科学研究費基盤研究B, No. 15320054, 研究者代表 井出祥子), 『『母語話者視点』に基づく解放的語用論の展開: 諸言語の談話データの分析を通じて』(平成20～21年度科学研究費基盤研究B, No. 20320064, 研究代表者 藤井洋子), および「社会・文化的場の共創と言語使用: 母語話者視点による語用論理論の構想」(平成23～25年度科学研究費基盤研究B, No. 23320090, 研究代表者 藤井洋子)のもとに、平成16年に日本語とアメリカ英語を、平成18年に韓国語を日本女子大学にて収集。また、平成20年にリビアでリビア・アラビア語を、平成24年にタイでタイ語を収集。平成28年に中国・北京で中国語を収集。すべてはDVDに収録され、文字化されている。

か」とともに発話される言語現象を取り上げ、詳細に分析した。

## 4. 分析

分析の結果、話し手は「なんか」を用いて否定的な態度を示す際、2つのパターンを用いていることが明らかになった。1つ目は「ストーリー構築過程における否定的態度の表明」、2つ目は「ストーリー構築完了後における否定的態度の表明」である。それぞれの例を以下、4.1の例1、4.2の例2で示す。

### 4.1 ストーリー構築過程における否定的態度の表明

#### 例 1

1:L:よし、やっ [てやるか	
2:R: [もう一回	
3:R:もう一回、棒を見つけてきて	
4:L:で、飛べ [て	
5:R: [うん	
6:L:ひ、ひ、 [一人で泣いた	
7:R: [飛べて	
8:L:ですわ	
9:R: [飛べて、嬉し涙	
10:R:ん、なん [だろ	
11:L: [あ、 [でも、	
12:R: [飛べて [、あれ	
13:L: [飛べて、でも実はここは	
14:R: [あ、飛べて	
→15:L: <u>「なんか、どこも行くところがな</u> [かったのかなと	
16:R: [あ、ああ、また、ゆ、せっかく飛べたけどゆき止まりだったから	
17:R:泣いた	

(J-5)

参加者は二人で協力しながらストーリーを構築している。9行目でRは「飛べて、嬉し涙」と、キャラクターが涙を流す場面を嬉し涙と表現する。その後、Lは11行目で「あ、でも」と何かを言おうとしており、Rのその解釈について何か発話しようとしている。Rも自分の解釈に疑問を生じ、12行目では「飛べて、あれ」と発話している。13行目でLは「実はここは」といった後、15行目で「なんか、どこも行くところがなかったのかな」と自分の解釈を伝え、それが嬉し涙ではなく、キャラクターがどこにも行けなかったことに対する悲しみの涙であることを示唆している。その発話を受け、16行目でRは「せっかく飛べたけどゆき止まりだったから」と発話し、Lの解釈を理解している。15行目におけるLの「どこも行くところがなかった」という発話は、明示的に相手の意見を否定する形ではなく、一見キャラクターの気持ちを代弁したかのような発話である。また、それを「なんか〜かな」と独り言のような発話形式を付加することによって表現している。しかしこの発話により、LはRの嬉し涙という解釈について否定的態度を示し、キャラクターがどこにも行けないことに気づかせ、悲しくて泣いたという解釈を導くことに成功している。このように、ストーリーを作り上げる過程において相手の発話に疑問が生じる場合、話し手は「なんか」とともに発話される特徴的な表現を用いて、解釈の違いがあることを示唆している。これらは以下の図のようなプロセスで示される。

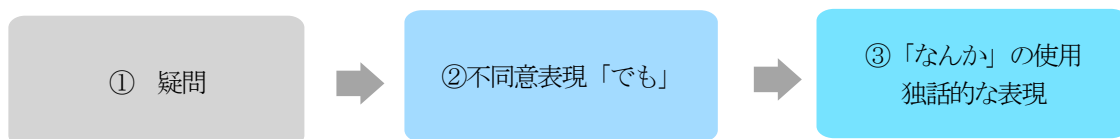
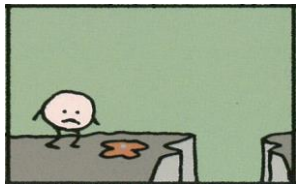


図1 ストーリーの構築過程における否定的態度の表明プロセス (例1)

まず、一方が相手の意見や解釈に対し何らかの疑問を持つ。その際、話し手は自分の意見が相手と異なることを「でも」の

ような逆接の接続詞を用いて伝えている。その後、話し手は「なんか〜かな」という独話的な表現<sup>2</sup>(Shikano & Sugisaki, 2019)を用いて、自分の心の中に浮かんだアイデアが不確かであることを示唆しつつも、カードとその配置から得られる別の解釈を提示する。このようなプロセスを経て、「なんか」とともに発話される表現は否定的態度を相手に伝え、カードの配置を変えることや別の解釈でストーリー構築を進めることへの働きかけを行っていた。

#### 4.2 ストーリー構築完了後における否定的態度の表明 例 2

01:L: おもしろい終わり方	
02:L: えー, どう [なんだろ	
03:R: [べちゃっでおしまい	
04:L: ん	
05:R: じゃ	
06:L: 踏み潰しちゃった, べちゃ, かな	
→07:R: うん, いいね, ちや, <u>なんかね</u> , <u>わたしの中では</u> =	
08:L: =うん	
09:R: <u>また 1人だよっていう</u> <u>シーンを作りたいかったの</u>	
10:L: ああ, はいはいはい, 最後に [ね	
11:R: [そうそ [う	
12:L: [あ, で, じゃ, [で, それだから, それを残したかったの	
13:R: [だから, だから, これ, こっちなかなとも思う	
14:L: ああ	

(J-24)

参加者はストーリーを二人で作成し終え、最終確認をしている。7行目でRは「なんかね、わたしの中では」と発話する。その後Rはこのキャラクターが再び一人であるシーンを作りたいかったと述べている(9行目)。その結果、LはRの意見を理解し(10, 12行目)、結果的にRは13行目でカードの再配置に成功している。「わたしの中では」、「作りたいかった」などの表現は、個人の願望を述べる表現形式である。しかし、話し手は「なんか」と発話し、新しいアイデアを持っていることを相手に示しつつ、それを個人的願望として表現することによって、一度作り上げたストーリーに対して否定的態度を示している。そしてこの言語行為がカードの配置を変え、ストーリーラインを大きく変えることに結びついている。話し手のこの一連の発話は以下のようなプロセスで示される。

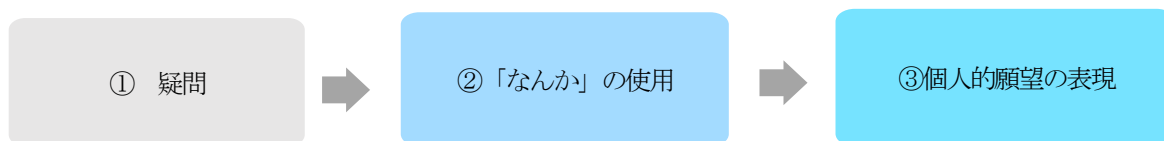


図2 ストーリー構築完了後における否定的態度の表明プロセス (例2)

ここでもまず一方が、自分たちの作ったストーリーラインに対し何らかの疑問を持つ。その後、話し手は「なんか」とともに「私」のような主観的な表現を用いて新しいアイデアを提示し、「作りたいかった」のような願望の表現を使用している。このプロセスによって発話される内容は、一見すると話し手の個人的な願望のみを述べたものであり、何かを否定するものではない。しかし結果として、この「なんか」とともに発話される表現は一度作り上げたストーリーラインに対する話し手の否定的態度を示し、ストーリー全体を大きく変えることへの働きかけとして作用していた。

## 5. 考察

ストーリー構築過程における否定的態度の表明(4.1)では、話し手は意見や解釈の違いに関して疑問を抱いた直後に、「な

<sup>2</sup> Shikano & Sugisaki (2019)では、周りに誰かがいる状態で発話される独話には「なんか〜かな」という表現が頻繁に現れ、聞き手に次の行動を決定させる示唆的な働きを持つことを指摘している。

んか」とともに発話される表現を用いて、聞き手に否定的態度を示唆していた。つまり可及的対応が求められる状況において、「なんか」が含まれる否定的態度の表明は行われている。疑問を抱いた直後、すぐさま相手に直接的な表現で否定的態度を示すことを避けるため、「なんか〜かな」のような自分の心の中に浮かんだアイデアが不確かであることを示唆する独話的な表現形式を用いている。これは互いの意見を尊重しながら進める共同作業という点において、できる限り早い段階で互いの考えを統一して円滑に進めるための方略と考えられる。一方、ストーリー構築完了後における否定的態度の表明(4.2)では、話し手は「なんか」とともに個人的願望として新しいアイデアを伝えている。参加者が協力して作り上げたストーリーを初めから振り返り、その一連の流れに矛盾がないか再考し、その結果、一度構築したストーリーラインを再検討する際に「なんか」を用いた否定的態度が示されている。つまり、適及的対応が求められる状況において「なんか」を含む否定的態度の表明は行われている。この再確認の作業はよりふさわしいストーリーラインを再構築するためのものであるが、参加者間の作業負担を増大させる可能性もある。また、一度二人で同意をしながら作り上げたものを大きく変える可能性や、相手の意見を否定する必要性も秘めていることから、話し手は相手への負担を減らすために、個人的な願望といった表現形式で否定的態度を示していると考えられる。

いずれの否定的態度の表明においても、話し手は直接的で明示的な表現は使わず、間接的な方法で相手にそれを示し、相手の考えや行動に変化を与えることに成功していた。日本語の意見の述べ方は婉曲的で<sup>3</sup> (梶原 2003)、強い断定を避ける<sup>4</sup> (白川 2009)と指摘されるが、本データにおいても否定的態度を表明する場面でその傾向が見られた。しかしながら、強い断定を避けつつも、話し手はそれを相手に伝えようとする際、「なんか」と発話し、様々な表現を用いていることが明らかとなった。「なんか〜かな」のような独話的な表現や、「私」「～したかった」などの個人的な願望と捉えられるような表現を「なんか」とともに使うことによって、話し手は聞き手に否定的態度を示唆していると言える。そのような中で「なんか」は、積極的な発話に関与する pragmatic marker としての機能を持つ (Sugisaki, 2023) ことから、話し手の否定的態度が発話されるきっかけとなる語として機能していると考えられる。

## 6. おわりに

本研究では、課題達成談話において話し手が否定的態度を示す際に発話する「なんか」の働きを考察した。特徴的な2つのパターンを分析することによって、実験参加者は相手の考えや意見に対し否定的態度を示す際、直接的な不同意を言語化せず、相手を尊重しながら意見を述べる傾向が明らかとなった。「なんか」を含む発話形式を用いることにより、話し手は否定的態度を示しながらも、課題達成における円滑なコミュニケーションに寄与し、共同体制を維持することに成功していた。これらのことから、話し手と聞き手が意見を交わす場面において、「なんか」は否定的態度を相手に伝えるためのきっかけとなる語として機能していると結論付けることができる。

## 参考文献

- 飯尾牧子 (2006). 短大生の話し言葉にみる談話標識「なんか」の一考察 東洋女子短期大学紀要 38, 67-77.
- 梶原綾乃 (2003). 留学生と日本人との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践 日本語教育 117, 93-102.
- 松村明 (編) (2019). 大辞林 第四版 三省堂
- 日本大辞典刊行会 (編) (1975). 日本国語大辞典 第15巻 小学館
- Shikano, H & Sugisaki, M. (2019). How Japanese Speakers Use Nanka in Quasi-Internal Monologues during Interactional Discourse, JELS 36. 282-287.
- 白川博之 (2009). 「言いさし文」の研究 くろしお出版
- Sugisaki, M. (2023). An Analysis of the Japanese Pragmatic Marker: Elaborative Function by Nanka. Studies in English and American Literature 58. 107-132.
- 鈴木佳奈 (2000). 会話における「なんか」の機能に関する一考察 大阪大学言語文化 9. 63-75.
- 田窪行則・金水敏 (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能 音声文法研究会 (編) 文法と音声 くろしお出版 pp, 257-279.
- 内田らら (2001). 会話に見られる「なんか」と文法化: 「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか 東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 24(2). 1-9.

<sup>3</sup> 梶原 (2003) では、日本語の意見の述べ方は婉曲的であると主張され、「かもしれない」「と思う」などのモダリティが多用されることを指摘している。

<sup>4</sup> 白川 (2009) では、日本語の意見表明における言いさしの使用が指摘されている。「けど」などの終助詞的用法のものや、主節が省略された場合の発話を指し、強い断定を避け、語気を和らげる働きをすることが述べられている。